

～ 2013年第9回国際美食養生コンテスト シンガポール・マレーシアの旅 ② ～



研究科コース 岡野定 玲子



8月14日(水)

朝食を済ませ、ホテルからバスに乗り込み、会場へ。ここで、私にとって大変ことを知らされた。コンテスト後に行われる各国の料理のデモンストレーションに、ピンチヒッターのアシスタントの仕事をおおせつかった。「…じえじえじえ！」みんなの荷物番の係から、大きな人事異動だ。やるしかない。みんなとそろいのエプロン、バンダナをして、いざ厨房へ。「料理をコンテスト展示会場へ運んで」「写真を見て、盛り付けて」「25gずつ計って」…次々と指令がとんできた。私なんかでいいのかしらなどなど考える余地なく、作業の指令。フーフーしながらも、各国の料理人らとともに、大きな厨房で仕事をしていることが、だんだんと、嬉しくて、楽しくてたまらない。そんな心境になってきた。ほぼ、デモンストレーションの準備が済んだころには、他の国の料理人が私たちの「道明寺」や「どら焼き」が物珍しいのか、数人集まってきた。お互いに作ったものを交換し合っただけで味見をしたり、ジュースチャーで美味しいを表現したりなど、楽しいひと時もあった。

本番、河本先生のデモンストレーションのアシスタントも無事、務めることができた。試食用に作った「道明寺」や「どら焼き」も参加者に美味しく食べて頂けた。

厨房にいる時間が多かったのも、まだ見ていなかったコンテスト展示作品をあわてて見に行っただけで、各国の料理の達人が作った見事な料理に目を奪われた。本当に素晴らしい料理ばかりだった。わが、日本チームの作品もとても良かった。多くの中華料理、韓国料理の中で、日本の料理は違った感じもして、目を引いていたように思えた。もちろん受賞式では賞を受賞し、みんな写真を取り合ったり、乾杯をしたりしながら喜び合った。

8月15日(木)

コンテストが終わり、これから4日間は、大型バス3台でのマレーシア観光。バスの窓から見える家々には椰子の木があり、黄色い実をたくさんつけているのが常に目に入って来た。南国の景色がどんどん後ろに流れ、初めは日本では見慣れない景色に感動していたが、だんだんと飽きてきたころ、突然海が視界に入ってきた。マラッカに入った。ここはガイドブックで見ている、是非、訪れたいと思っていたところだった。

マラッカはマレーシアの原型、マラッカ王国が誕生した地であり、ポルトガル、オランダ、イギリスに統治され、日本にも占領された歴史がある。国内最古の建築物も残り、独自の文化を形成し、2008年には世界遺産に登録された、古都マラッカである。

この地は、たっぷりと時間をかけて観光したいところだったが、中国、台湾、韓国、日本・・・の大型バス3台での団体観光なので、仕方がない。多くの観光客が集まっている「オランダ広場」でバスから降り、短時間の散策。独特なオランダの建築クライストチャーチ、隣の旧総督邸スタダイスとともに赤褐色に白の十字架は目に鮮やかだ。教会の正面には色とりどりの花が咲き乱れている花壇があり、その中央にはビクトリア噴水が涼しげに水を降らせていた。広場の周りには色鮮やかな花かごで飾った自転車のタクシー、トライショーがずらりと並んでいた。観光客を乗せて古都巡りをするトライショーも楽しそうだった。また、マラッカ川の対岸には、かつて東南アジアの商業の拠点として繁栄を極めた面影を残す白い建物が並んでいた。

次に訪れたのは、マラッカ海峡を望む埋立地に建てられたイスラム教のモスク。空の青さと海の蒼さの中に感動的な美しさで建っているモスク。満潮時にはモスクを支えている杭が海中に沈むために、海側から見るとまるで海に浮かんで見えるように設計されているそうだ。モスクの入り口から海が見える。海風がモスクの回廊の中に入り込んでくるかのようだ。モスクの周りの庭園にはマレーシアに多く見られる葉柄も葉軸も鮮やかな緋赤色の姫猩猩椰子も青い空にすくっと、そびえ、まるで中東の国にでもいるようだ。海と一体化した聖なるモスクの不思議な世界に入り込んだ気分になる。

マーベラスホテルに到着。素晴らしく豪華なリゾートホテル。部屋まで続く中庭には椰子の木に囲まれた2つのプールがあり、中庭の散策だけでも十分に楽しめる。さらに部屋からは鮮やかな青い空と海を眺めることができ、ベランダに出て、思わず感嘆の「すごい！」「素敵！」の連発。

(以下、続きは43号へ)

